

---

# 落ちていく闇の中で、

はなちょこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

落ちていく闇の中で、

### 【Nコード】

N1736M

### 【作者名】

はなちよこ

### 【あらすじ】

明菜が死を覚悟した瞬間。  
世界が変わった……………。

私の目に飛び込んできたのは。  
下を歩いている人々。

車道を途切れることなく走っていく車。

鼠色のアスファルト。

最初はミニチュアのように見えた風景は  
徐々にいつも見る風景と同じ大きさになっていく。  
唯一、違うのは。

いつもの風景が逆さまに見えることだった。

ああ、私、死ぬんだ……………。

どうせなら最後に……………。

悔しいな。

すごく悔しい。

そのまま私は目を閉じた。

目を覚ますと見慣れた天井が見えた。

ピリリリリリリリ。

耳障りな電子音が辺りに響く。

私は無意識に携帯に手を伸ばして、アラームの機能を解除した。  
体を起こして、ため息をついた。

嫌な夢を見た。

半分くらい忘れてしまったけど。

ビルの屋上から落ちる夢だった。

ああ、本当にリアルで怖かった。

夢で良かった。

「明菜ー。起きなさい。遅刻するわよ」

ドアの向こうから母の声が聞こえた。

「はい」

私はそう返事をする素早く制服に着替えてダイニングへ行った。

ダイニングのテーブルには朝食が並んでいた。

父は新聞を読みながらトーストを食べている。

私も席についてスクランブルエッグをフォークですくった。

ふと、テレビに目をやる。

「バスが山道で事故を起こすなんて怖いわねえ」

母がそう言った後

「運転手は運転前に酒を飲んでいたらしいな」

父がそう言うてテレビをチラリと見た。

「一ヶ月くらい前にも似たような事故あったよね」

私は牛乳を飲みながらそう言った。

「・・・そんなことあったかしら」

母が父の空になったコップに牛乳を注ぎながら言った。

番組が芸能ニュースに切り替わった。

私はテレビの画面にデカデカと映し出された文字を見て驚いた。

「へえ。この女優さん結婚したのね」

母がテレビを見ながらそう言った。

私は父に「ちよつと新聞見せて！」と言って、新聞を見る。

心臓の鼓動が速くなった。

もう一度、よくよく見てみる。

見間違いない。

「・・・今日って六月一日？」

震える声でそう聞くと父が言った。

「ああ。そつだよ」

父はそう答えると朝食を食べ終えて席を立った。

「明菜もブーツとしてないで早くご飯食べちゃいなさい」  
そんな母の言葉は私の耳には届かなかった。

六月一日。

父が嘘をつくはずなどない。

新聞にだってそう書いてあった。

ニュースだって……。

ごくんと唾を飲み込んだ。

考えたくないけど。

信じたくはないけど。

どうやら私は。

一ヶ月前に戻ってきてしまったようだ。

なんで？

どうやって？

どうして？

色々な疑問が頭に浮かんだけど。

そうとしか考えられない。

じゃあ。

なんで私は一ヶ月前に戻ってきたんだろう。

学校へ向かう道を歩きながら考える。

少し遠くに目をやるとビルが見えた。

そうだ。

ビル。

「明菜、おはよう」

その声にハッと我に返った。

目の前には親友の真美が立っていた。

「あ、おはよう」

「ねえ。何だか顔色、悪いよ」

真美はそう言って私の顔を覗き込んだ。

「うつん。別に何でもないよ」

私はそう言って慌てて笑顔を作った。

一ヶ月前に戻ってきた。

そんなことを言っても誰も信じてはくれないだろう。

真美とお喋りをしながら学校への道を歩く。

「昨日、彼氏と別れたんだ」

知ってる。

そう言いそうになったのを慌てて堪えて

「え?! どうして?」

そう驚いたフリをして聞いてみた。

真美は遠くを見ながらポツリと呟いた。

「・・・好きな人がいるんだ」

私は一ヶ月前と同じように「誰?」とは聞けなかった。

昨夜、見た夢。

あれも夢ではない。

さつき、ふとビルを見たら思い出した。

私は確かにビルから落ちたんだ。

地面に落ちていくとき。

私は気を失って、気がついたら自分の部屋にいた。

そして一ヶ月前に戻っていた。

でも。

なぜビルの屋上にいたのか。

なぜ私は屋上から落ちてしまったのか。

それが思い出せない。

もし。

このまま同じように過ごしてしまったら。  
一カ月後。

また私はあのビルから落ちてしまつのではないだろうか。  
それとも。

今この状態が夢なのか。

ああ。

何だか訳が分からなくなってきた。

「おはよう。鈴木」

窓の外を眺めてぼんやりしていると。

後ろで元気な声が聞こえた。

無視していると。

視界にそいつの顔が入った。

「なによ」

「無視するのは良くないよー」

高橋がそう言ってニツと笑う。

高橋は一年生の時に同じクラスになつて  
文化祭がキツカケで話すようになった。

二年生も同じクラスになったので

こうしてよく高橋から話しかけてくる。

クラスで目立つほうでもなく地味な雰囲気でもなく

ごく普通の男子だ。

「何か元気ないね」

高橋の言葉に真美が言う。

「でしょ？ さっきからずっとそうなの」

その横顔がとても嬉しそうに見えた。

とても昨日、彼氏と別れたとは思えない。

私はそんな真美から視線を外して

また窓の外に目をやった。

「ねえ。カラオケ行こうよ！」

真美がそう言って笑う。

「ストレス発散したいしさ」

私は何も言わずに真美についていく。  
しばらく歩くと真美が足を止めた。

「この二階にあるカラオケ安いんだ。元彼とよく来たよ」  
私は目の前に建っているビルを見上げた。

次の瞬間。

なぜか私はビルの屋上に立っていた。  
そして。

私の肩を誰かが勢いよく押した。

「鈴木！」

その声にハッと目を覚ました。

クラス全員が私に注目している。

どうやら居眠りをしてしまったらしい。

「一番前の席で居眠りするとはいい度胸だ。罰として次の問題解け」  
先生はそう言うのと丸めた教科書で軽く私の頭を叩いた。  
額から嫌な汗が出た。

さっきのは夢なんかじゃない……。

一ヶ月後。

私がビルから落ちたあの日の記憶だ。

そうだ。

確かあの日は。

あのビルに真美とカラオケに行って……。  
それからが思い出せない。

でもハッキリとしたことがある。



私はあのビルの屋上から誰かに突き落とされたんだ。  
事故なんかじゃない。

じゃあ、誰が？

もしかして……………。

真美が私を……………？

ううん。

そんなはずない。

親友だもん。

真美はそんなことしない。

結局。

何も分からないまま数日が過ぎた。

あれから。

あの日の、私がビルから落ちた日の記憶は

真美と一緒にカラオケに行ったことと、誰かに突き落とされた、  
ということ。

まだその二つしか思い出せなくて。

相変わらず、二度目の六月を過ごしていた。

「お。鈴木。お昼、焼きそばパンかー！」

お昼休み。

真美とお昼ごはんを食べていると高橋がやってきて、そう言った。

「なによ。高橋」

私が焼きそばパンを食べながらそう答える。

「何だか最近の鈴木、冷たいなあ」

高橋はそう言う友達のと友達に冷たいよ。

「本当。最近、明菜って高橋君に冷たいよ」

真美はそう言う机の上に置いた携帯に目をやった。

その瞬間、彼女の表情が変わる。

「どうしたの？」

私がそう言っていると真美は首を横に振って言った。  
「何でもない」

なんでだろう。

私はなんで高橋にこんなに冷たくしてしまうんだろう。  
自分でもよく分らない。

何かあったんだっけ。

………何か。

「好きだ」

目の前にいる男子が顔を真っ赤にしてそう言った。

「え？」

私は驚いて聞き返す。

「だから！ 鈴木のこと一年の時から好きだったんだよ」

それだけ言うと、その男子は校舎の方へと走って行った。

私はそんな高橋の小さくなった後姿を眺めながら呟いた。

「そんなこと、突然、言われても………」

目を覚ますとそこは見慣れた部屋だった。

テレビがつけっぱなしで賑やかな笑い声が静かな部屋に響いている。

膝の上には本が開いたまま乗っている。

どうやらリビングのソファに座りながら本を読んでいて、居眠りをしてしまったらしい。

さっきのは。

高橋から告白されたのは。

夢じゃない。

思い出した。

あの事件が起きる3日前に私は高橋から告白されていた。

だから自然と冷たくしてしまったのだ。

私は高橋の気持ちには答えられない。

だって真美の好きな人は……………。

そこまで考えてハッとした。

やっぱり私を突き落としたのは真美かもしれない。

真美が彼氏と別れたのも高橋のことが忘れられないからで。

それで、あの日……………。

そう考えると辻褄が合う。

私はやっぱり真美に突き落とされたのだろうか。

だけど。

やっぱり真美が私を突き落としたなんて思えない。

きつと、何かあるはず。

まだ思い出せない大事な記憶が。

それから。

また変わらない毎日を過ごした。

私が一ヶ月前に経験している日々だということと、これから起る、あの事件さえなければ、ごく平凡で幸せな日々だった。

だから。

私がビルから突き落とされるなんて。

夢なんじゃないかとさえ思えてきた。

そして。

とうとう、事件の前日となった。

お昼休み。

手に持ったサンドイッチに視線を落としながら、真美が大きな溜め息をついた。

「どうしたの？」

そう聞くと、真美が口を開いた。

「最近さあ、誰かに後をつけられてるみたいなの」  
「え?!」

驚いた私に、真美が慌てて付け足した。

「あ、でも、私の勘違いかもしれないんだけどね」

「・・・・・・そつか・・・・・・」

「あーあ。カラオケ行きたいなあ。でも今日は部活あるしな」  
真美はそう言ってサンドイッチにかぶりついた。

背中に悪寒が走る。

体が震えた。

・・・・・・夢なんかじゃない。

明日、起きることは夢じゃない。  
やっと思い出した。

誰が私を突き落としたのか。

私の肩を思い切り強く押した。  
その手を。

ハッキリと思い出した。

「ごめん。ちよつと私」

それだけ言うつと私は席を立った。

友達とお昼ご飯を食べていた高橋を廊下に呼び出した。

「なんだ？ 告白の返事か？」

高橋の言葉に私は言った。

「うっん。ごめん、そのことじゃないの」

「・・・・・・いや別に冗談だからいいけど」

高橋はそう言うつとポリポリと頭を掻きながら下を向いた。

「高橋って体操部だったよね？」

「ああ。そうだけど」

「どうしても頼みたいことがあるんだ」

私の言葉に高橋が真剣な顔つきになった。

次の日。

朝起きると窓を開けた。

快晴だ。

雲ひとつない青空。

鳥の声を聞きながら

すう、と息を吐いた。

大丈夫。

上手くいく。

心の中でそう自分に言い聞かせて

いつもより早めに家を出た。

メールが届いたことを知らせるメロディーが携帯から鳴った。

高橋からだ。

「貸してもらえたよ。予定通り準備できそうだ」

そのメールの内容を見てホッと安心した。

今日、学校を休むこともできた。

でも。

どうしても私を突き落とした犯人を捕まえたいのだ。

それに私が今日、ずっと家にいたとしたら。

きっと私ではなく……。

今日一日は、いつも以上に授業に身が入らなかった。

五分置きに時計を見ては早く時間が過ぎないかとイライラしていた。

こんなに一日が長く感じたのは生まれて初めてだ。

放課後。

真美が言った。

「今日は部活がないんだ。カラオケ行こう」  
「うん」

そう返事をした私の心臓の鼓動が速くなっていく。

真美とお喋りをしながらカラオケまでの道を歩く。

あのビルが近づくにつれて

今すぐここから逃げたい、という衝動にかられたが  
それを必死で抑えた。

チラリと後ろを見ると、やはり誰かの気配があつた。

・・・・・・やっぱり。

私は拳を握った。

今すぐにでも殴ってやりたい気分だった。

が、それでは計画が台無しだ。

あのビルの前で真美が足を止める。

私はビルを見上げた。

五階建てのビル。

その屋上から私はあいつに突き落とされた。

いや、これから突き落とされるんだ。

そう思うと体が震えた。

「先に歌っていいよ」

カラオケの個室に入ると私は真美にそう言った。

「そう？　じゃあ先に入れるね」

真美は機械を慣れた手つきで操作した。

私は携帯で時計を確認した。

そろそろだ。

ガチャ。

ドアが開く音がしたと思うと。

部屋の中に男が入ってきた。

真美が驚いた顔で男を見て言う。

「・・・・・・・・昌弘」

真美の元彼だ。

一ヶ月前に別れを切り出したというあの元彼。

「真美。話がある」

昌弘はそう言うと言美の細い腕を掴んだ。

真美は抵抗した。

私は必死で真美を助けようとしたけど男の力には敵わない。

昌弘は真美を無理やりエレベーターに乗せた。

私もそれについていく。

エレベーターを降りて屋上に続く階段を上っている最中。

私は昌弘にバレないように高橋にメールをした。

「こんな所に連れてきて、何なのよ」

真美が昌弘を見ないようにして、そう言った。

「俺とヨリを戻してほしいんだ」

「だから私には好きな人がいるって言うてるでしょ！」

真美はそう言うってからハッとして、こう聞いた。

「まさか・・・・・・・・私の後をつけてたのって・・・・・・・・」

「そうだよ」

昌弘はそう言うてニッコリ笑った。

「携帯に知らないアドレスで変なメールが来るのも・・・・・・・・」

真美の言葉に昌弘は意味深な笑顔を見せた。

「最低！　ねえ、真美、今からでも警察に連絡しよう！」

私がそう言うと言昌弘は今度は私の腕を掴んだ。

そして思い切り突き飛ばした。

私の体は飛ばされ、その反動で尻餅をついた。

真後ろは、ちょうどフェンスが途切れていて  
次に押されれば私は下に落ちてしまう。  
二度目の今だから分かっていることだ。  
私は昌弘を睨んで立ち上がった。  
「睨むんじゃないねえ！」

次の瞬間。  
ドン。

昌弘が力一杯私の肩を押した。  
そして。  
私の体は一瞬だけ宙に浮かんだ。  
そのまま。  
真っ逆さまに下に落ちていく。

「鈴木ー！」  
下で高橋の声があった。  
ドサッ。

落ちた場所はやわらかいモノの上だった。  
高橋に頼んで学校にある、やわらかいマットとそれを持ち上げて  
もらったための体操部員を用意してもらったのだ。

「大丈夫か?!」  
高橋の言葉に私は頷いた。  
遠くでパトカーのサイレンの音が聞こえた。  
「明菜! 大丈夫?!」  
そう言っつて真美が駆け寄ってきた。  
「……平気」  
私はそう言っつて俯いた。

さっきの光景は。



見間違いだっただんころうか。  
私が下に落ちる瞬間。  
真美がニヤリと笑ったのは。

（おわり）

（後書き）

ここまで読んでくれた方ありがとうございました。

これも数年前に書いた話です。

恋愛抜きで書いたのはかなり久々でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1736m/>

---

落ちていく闇の中で、

2010年10月8日11時25分発行